

総評 2025年12月分 杉本真維子

「手を繋いでみたい、／カラスやミミズとも。／あなたのてのひら／あつたかかったし」
いまはじまるの（兵庫県）

ここでの手を繋ぐことは比喩ではない、と思える。そこに惹かれる。人間が知らないだけで、カラスにもミミズに「手」があるかもしれない。フェアなまなざしがファンタジーを超え、現実をつくるのだと思う。

「在中のはんこを押してゆく夜の／事務室に押し寄せる黒うさぎ」雲理そら（大阪府）
「押」が二度出てくる。下へ押す力と、横へ押し寄せる力。その二つが拮抗し、調和を生んでいる。言葉がぎっしりと詰まったその密度の高さも魅力だ。

「除け者にされた獸の毛が詰まり／鍵が奥まで入らない星」常田 瑛子（山口県）
なぜこんなに魅力的なのだろう、と考えると、常田さんには、ほかの書き手にはないもう一押しがある。それがさいごの「星」ではないか。この「星」があるから、闇が際立つ。闇が闇であることに気がつく。もっといえば、私たちは、闇に気づけないほど、闇のなかにいるのだろう。

「洗濯物の向こうに金星を見る／できない約束はしないと誓う」寸草（東京都）
洗濯物という日常の向こうに現れた金星が、「いまここ」を非日常に変える。誤りに気づくなど、普段見えないものが見えるのは、そんな瞬間かもしれない。

「やわらかな細胞壁に守られて／不在者の／ ためたことばを／ ひらがなにする」波津
ゆみ（神奈川県）
こころのかたちを問われたら、このように答えることができそうだ。

「朝がくる／傷つきたくて湖畔に白光り／ここは他所の家」森川 紘（福井県）
「傷つきたくて」の違和感が、かえって読み手をひきつける。そのような感情は存在するのか、と。…存在するかもしれない。刺激を欲する気持ちは傷を欲する気持とどこか重なっている。

「つるひとつ／なくして鳥になるメガネ」まちのあき（宮城県）
名前からではなく、かたちから見る視点が、想像力を解放させる。この観察力は詩歌にとってとてもたいせつなものだろう。

「白鳥とは殴られた後の静寂」奥村 俊哉（埼玉県）
「白」の痛みを見抜く言葉。詩のセンスが感じられる。

「手に入れることのなかった連絡が／かがやいている煮凝りのよう」伏見幸慈（大阪府）
煮凝りのようなかがやきが忘がたいものとして残る。連絡とはこんな素晴らしいものだったのか、と目が覚める。

「霜を踏む音の明さ聞く度に／ひとりで生れてきたように」川瀬十萌子（茨城県）
ほんの一瞬、孤独が明るく照らされる。経験を超越した音に耳を澄ませたい。

「目の裏の 暗さは似てる 水底に／沈むわたしの 腸の永きに」水底（北海道）
「腸」が際立つ。「わたし」には見えないものとしてわたしのことをよく知っているもの。
「永きに」は文脈としてぎりぎり口語としても受け取れると思った。

次回もお待ちしています！